

袴狭遺跡群と兵庫県北部の木製祭祀具

中村 弘（兵庫県立考古博物館）

1. 遺跡概観

但馬地方において、律令期の木製祭祀具が出土した遺跡は17遺跡にのぼる。ほとんどが数点から数十点未満の出土数であるが、中には10,000点以上が出土した遺跡もある。遺跡の種類には国府・郡衙推定地およびその関連施設、寺があるが、性格が不明な遺跡からも点数が少ないが出土している。国府推定地である深田・カナゲ田遺跡や郡衙推定地では、中心部の状況が明らかではなく、周辺の湿地帯や、谷間をさかのぼった上流からの出土例が多い。寺では、国分寺の寺域を画する溝や、古代寺院からも出土している。

2. 袴狭遺跡群と木製祭祀具

但馬地方で最も多くの木製祭祀具が出土しているのが袴狭遺跡群で、形状のわかるものだけでも10,000点を超える木製祭祀具が出土している。他の出土品には木簡、墨書土器のほか、銅印、帯金具、石帯、銅鈴、銅鏡などがあり、出石郡衙および移転前の但馬国府であるという説もある。

砂入遺跡では、7世紀後半から8世紀前半の流路から大量の木製祭祀具が出土しており、袴狭遺跡群でもっとも古い。その後、8世紀後半から10世紀前半には杭や枝で敷き詰められた道路状の遺構が湿地に作られており、木製祭祀具がその上部の土坑や周辺からも大量に出土している。道路状遺構の長さは少なくとも70m以上に及び、どこまで延びるかは確認できていない。

袴狭遺跡では、8世紀中頃から9世紀初頭に掘立柱建物が検出されているが、調査区の制限もあり、整然とした建物群として復元されるには至っていない。主に木簡の検討から移転する以前の但馬国府（第一次国府）に関連する施設との説がある。9世紀前半から10世紀には礎石建物群が検出されており、出石郡衙関連施設と考えられている。荒木遺跡では7世紀末から8世紀前半の掘立柱建物が検出されており、袴狭遺跡以前の出石郡衙関連施設と考えられているが、木製祭祀具は出土していない。

次に、木製祭祀具であるが、もっとも豊富に出土している袴狭遺跡群では、以下のような木製祭祀具の型式変化が看守される。 組成の簡素化（舟、刀、剣、鋤や不明の形代が減少し、消滅する） 人形の増加（斎串、馬形に比べて人形の割合が増える） 規格化（人形、馬形、斎串の形が規格化する） 写実化（人形、馬形が写実的になる） 長大化（1.5～3倍のものが出てきて、多様化する）

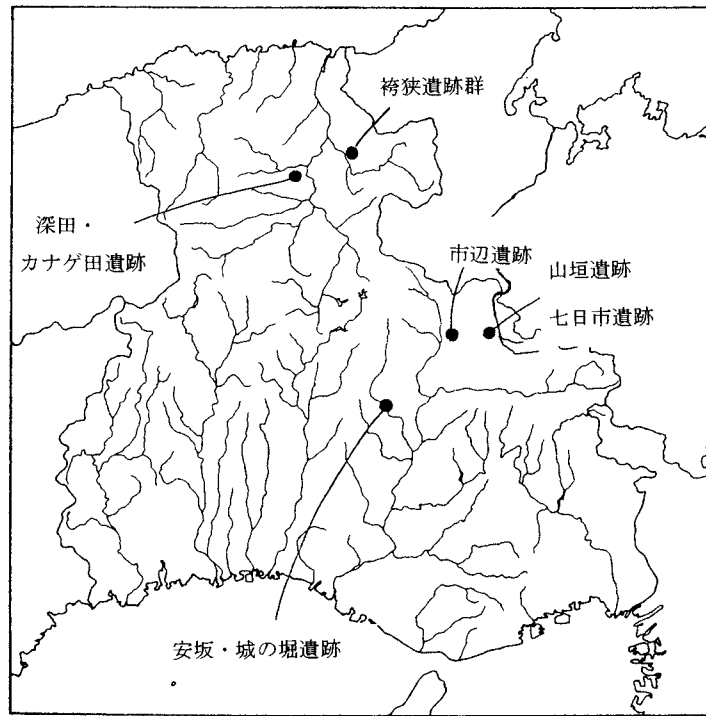
また出土場所では、上記の道路状遺構の他、ほとんどが水田土壌および溝からの出土で、中には柱穴に同一製作者による人形がまとまって置かれているものや、土坑、井戸内から出土したものもある。

3. 兵庫県北部での木製祭祀具

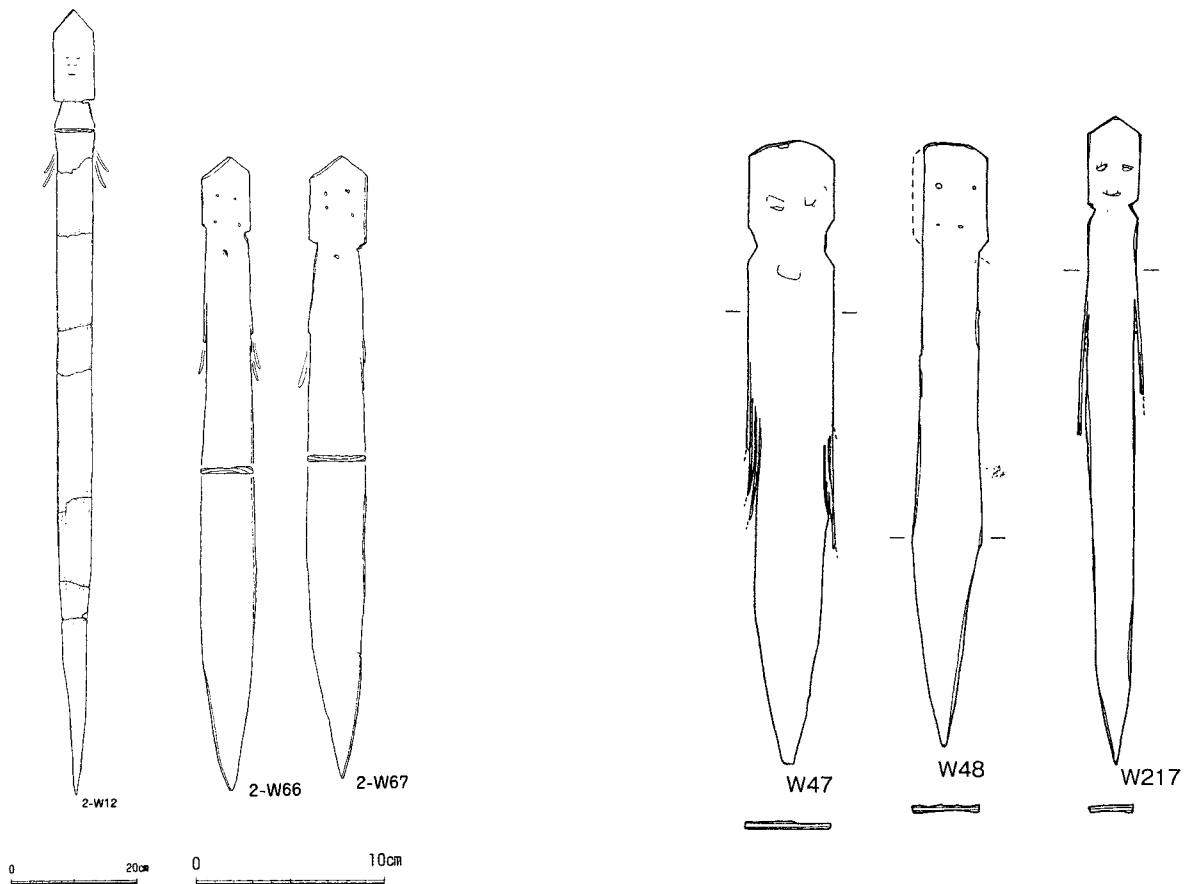
兵庫県北部の丹波に位置する市辺遺跡（氷上郡衙関連）では、二本足の人形に混じって一本足の人形が出土している。この型式は播磨北部の安坂・城の堀遺跡（多可郡衙関連）でまとまって出土しており、加古川上流域の特徴といえるのかもしれない。一方、同じ氷上郡内にあるものの、低い分水嶺をはさみ、日本海へ流れる由良川流域に位置する山垣遺跡・七日市遺跡（氷上郡衙の支所関連）では2本足の人形のみが確認されているので、8世紀から9世紀段階では、同じ郡の役所であっても木製祭祀具自体は地域性を反映するような形で製作、運搬されていた可能性が考えられる。

<参考文献> 渡辺昇「兵庫県の律令祭祀遺跡について」『兵庫県の歴史』28、1992年

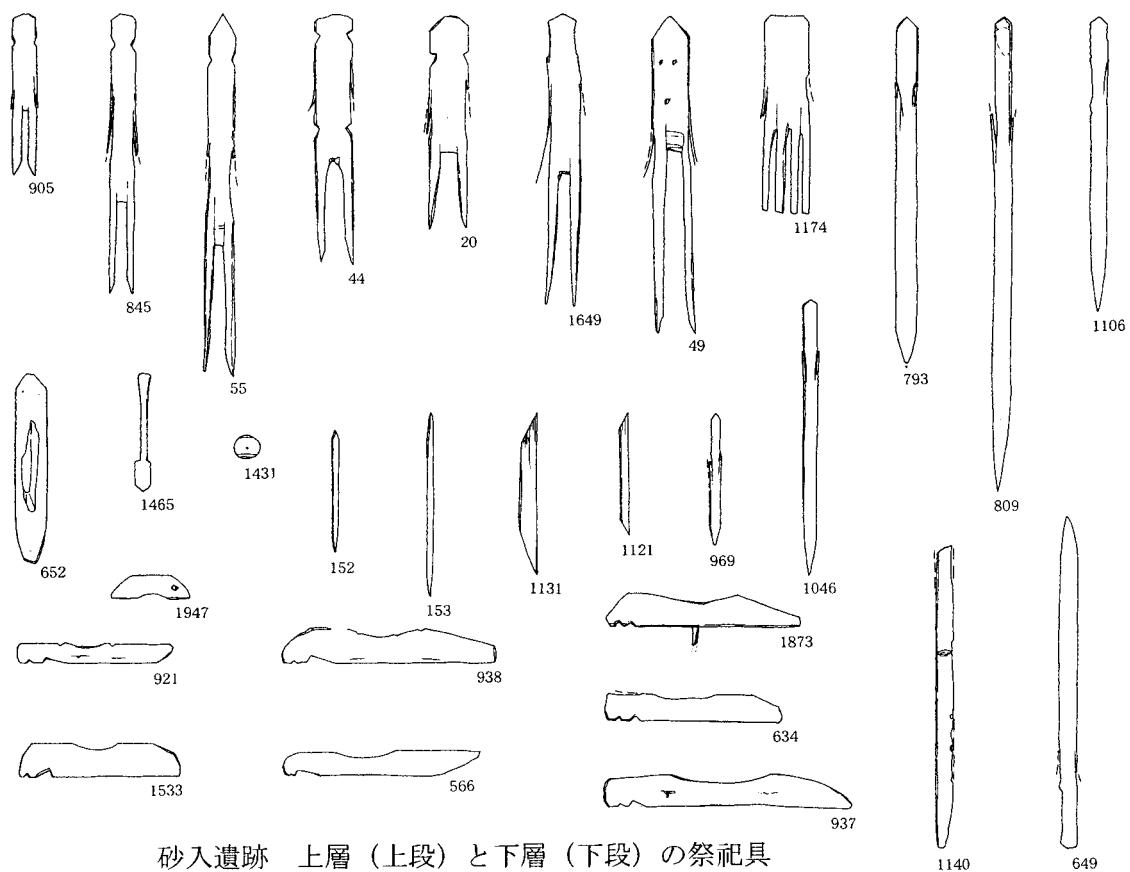
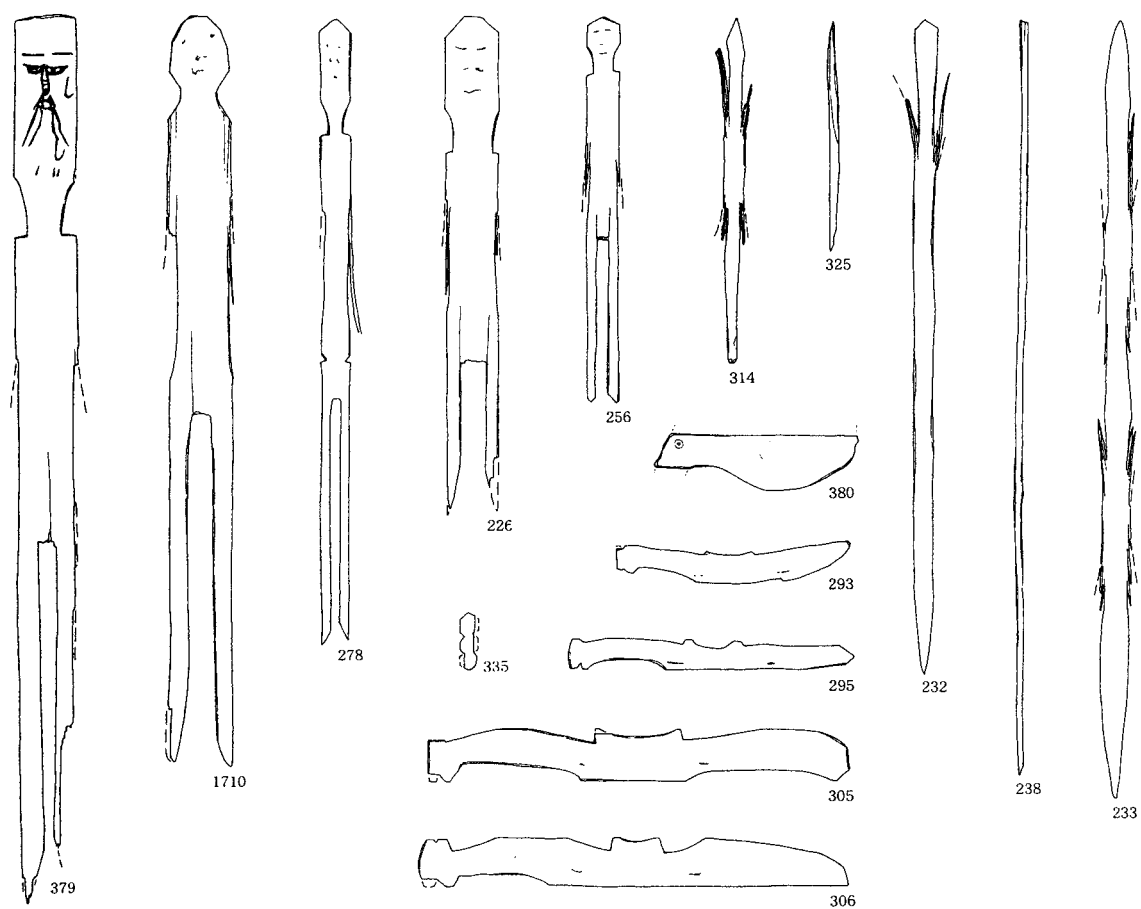
図は各報告書より転載



関係遺跡位置図



一本足の人形（左：安坂・城の堀遺跡／北播磨、右：市辺遺跡／丹波）



砂入遺跡 上層（上段）と下層（下段）の祭祀具